



小日浦



籠（頭を載せる板が取り付けられている）

“天空の段々畑” –小日浦–

かつて、越知町南西部の小日浦地区に、天まで延びるほどの壮大な段々畑があった。東西方向に延びる山の南斜面にへばりついた下方の小日浦集落を包むように山頂まで一面に幾重にも石垣の築かれた目を見張るほどの壮大な段々畑である。主作である食用のサツマイモとオオムギを植えたもので、ムギを収穫した後に米に代わるトウモロコシも食用に植えたという。これを築いた当時の村人たちの気の遠くなるような苦勞が偲ばれるとともに、正に“芸術”ともいえる景観を有する畑であった。

この様子を写した半世紀以上も前の昭和34年の貴重な写真が今も残っている。当時はまだカメラが普及せず、モノクロの写真であるが、神戸製鋼のマンガン鉱の採掘で大いに賑わった集落がそのまま写っている。この頃は現在よりもかなり寒かった所為であろうか、一面に雪化粧をした山々、段々畑、それに頂上付近にあった小日浦小・中学校（当時は尾川第二小・中学校）がはっきりと映し出されている。石垣の高さは2～4尺ほどもあり、苦勞して丁寧に築かれているのがわかる。段々畑は、まともであるのは学校（標高512m）までで、それよりも上から頂上（標高608m）まではまばらとなる。

現在小日浦集落には3世帯5人しかいないが、当時は36戸の家屋があり、住民は全盛期には200人を超していたと思われる。この頃の学校の生徒数は、小学生：80人、中学生：40人の計120人ほどいたという。地元小日浦の生徒は10～20分で登校できたが、佐ノ国や南ノ川・大屋敷集落の生徒は40～50分かけて登校したようである。残念ながら、マンガン鉱山の閉山に伴う人口の減少、高齢・過疎化等により学校は閉校（昭和44年 中学校、昭和53年 小学校）となり、段々畑も現在は植林

に変わり、その全容をみることはできないが、いつの日かまた我々の目の前に姿を現す日が来るかもしれないし、是非もう一度見てみたいという切望に駆られる。

今回紹介する写真は、地元小日浦出身の岡村豊延氏（越知町8区）によって撮影されたもので、当時としては珍しい二眼レフカメラを使用したという。氏は元は大工で、地元にも古くからあって廃れかけていた「聖神社」を夫婦でボランティアで修復し蘇らせた人物でもある。本社は、谷沿いの断崖絶壁の洞穴にあって、その立地条件が鳥取県三徳山山佛寺の「投入堂」〔平安時代：国宝〕に似ていることから“土佐の投入堂”と呼ばれ、多くの人々に親しまれ、四季を通じ賑わいを見せている。

小日浦地区には、こんな感動的な話が残っている。それは、川漁に行っていて足を滑らせ頭蓋骨骨折をした重症の村人を籠に乗せて隣村の佐ノ国を経て越知町内の病院まで約20kmの道のりを4～5時間もかけて運んだという話である。その時の籠が現在も残っており、しかも、乗せられた人物（岡村秀道氏）とそれを交代で担いだ4、5人の内の一人（岡村忠男氏）が現在も越知町内に健在であるという。

この他にも、地区の南端部の大ヲ山眺望所付近においては、県内では1,000m以上の山でしか見られない「アケボノツツジ」が、ここでは800m未満の低い場所で古木から成る群落が見られ、大変魅力的で特異な場所である。さらには、ここと“土佐の投入堂”の間の谷沿いには、直径：80～90センチのカエデ（モミジ）の古木が15～16本あり、春の新緑、秋の紅葉が実に美しい。

このように、小日浦は実に見所の多い地域であり、越知町の人気観光スポットとして今後の期待が大きい。

タンポポ (キバナシロタンポポ) の里 越知町

大倉 浩典



キバナシロタンポポ

今やコスモスは、越知町の秋の顔として定着しましたが、今回は越知町の春の顔としてタンポポを推薦したいと思います。

現在高知県では、『高知県植物誌』のための植物調査終了後、引き続き牧野植物園内に「高知県タンポポ調査実行委員会」を設け、『タンポポ調査・西日本2010』、『タンポポ調査・西日本2015』に参加し、タンポポの調査を行っています。これは、在来種のタンポポは開発など人手の入らない、おだやかに管理された土地を好むのに対し、外来種のタンポポは開発による土木工事や土地改良により環境が破壊された土地に侵入し分布を拡大する性質があり、この性質を利用してタンポポの分布状況を調べその地域の環境診断をしようとする試みが1970年代に大阪で始まりました。5年毎に調査を行うことで大きな成果を挙げ、これを受け西日本に調査範囲を拡大し高知県を含めた西日本19府県で2010年から5年毎にタンポポ調査が一斉に行われております。

日本には昔からある在来種のタンポポが約20種類、明治時代にヨーロッパから北海道に移入され帰化した外来種のタンポポ2種類が有名で、また在来種のタンポポも地域によって種類が異なり、代表的なものを挙げると、北海道地方で見られるエゾタンポポ（花は黄色）、関東地方で見られるカントウタンポポ（花は黄色）、東海地方で見られるカンサイタンポポ（花は黄色）・シロバナタンポポ（花は白色）などが有名で、一方外来種はセイヨウタンポポ（花は黄色）・アカミタンポポ（花は黄色）の2種類です。

高知県では在来種のタンポポはほとんどがシロバナタンポポで、昭和40年頃までは高知県で「タンポポの花は何色？」と子供に聞けば「白色」と答えが返ってきたものでした。しかしながら、経済発展と共に高知県でも道路工事や河川の改修・宅地造成が盛んになると、またたく間に外来種のセイヨウタンポポが侵入し、地味な在来種のシロバナタンポポは影が薄れ（個体数が減った訳ではない）、派手な黄色のセイヨウタンポポが目立ち、今や高知県でも“タンポポの花は黄色”という時代になってしまいました。

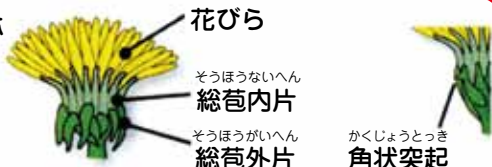
なお、在来種と外来種の見分け方は、^{そうほうがいへん}総苞外片が下向きに反り返っておれば外来種、反り返らず上向きなら在来種、さらにシロバナタンポポの場合は^{かくじょうとつき}総苞外片の先に角状突起（外来種には無い）があるので区別はしやすいが、2度の調査で在来種と外来種の間で雑種のタンポポが作られていることがわかり、総苞外片による区別が難しくなってきました。



シロバナタンポポ

高知県では2001年から2007年まで『高知県植物誌』のための植物調査で一応タンポポも調査をしたのですが、2010年・2015年の2回タンポポだけを取り上げて調査をしてみると、植物誌の時の植物調査は特にタンポポについてはかなりいい加減だったと思われる。すなわち、2009年発行の『高知県植物誌』に収録された高知県内のタンポポの種類は、在来種がシロバナタンポポ・クシバタンポポ・カ

花の各部名称

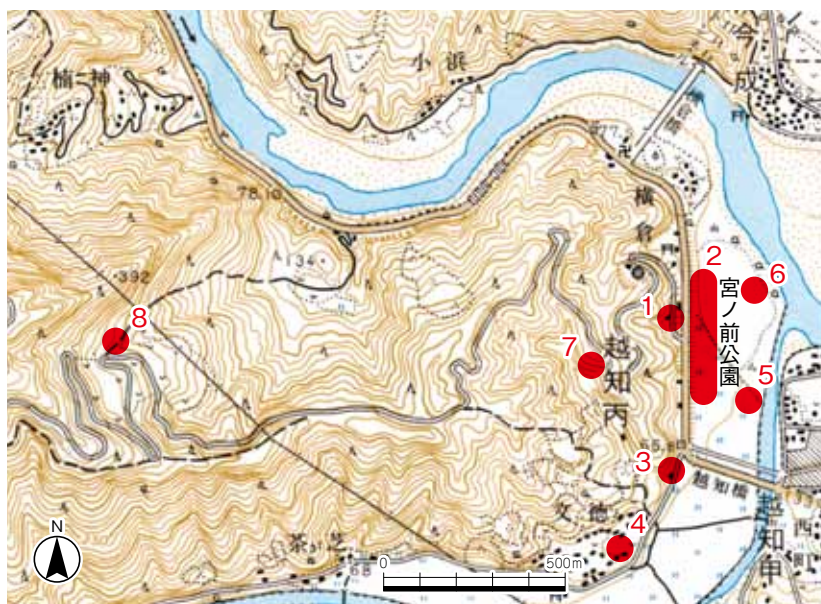


タンポポ調査・西日本 2015HP より抜粋

外来タンポポを見分けるポイント



総苞外片のそり返り
セイヨウタンポポと
アカミタンポポの
総苞外片はそり返る。



ポとシロバナタンポポ、キバナシロタンポポとセイヨウタンポポ、またキバナシロタンポポとシロバナタンポポとセイヨウタンポポの3種類が混生する場所もあり、生え方も他の地区とは変わっているようです。現在越知町でキバナシロタンポポが確認されている場所は以下の通りです。

①横倉宮入口の「ドライブイン片岡」の駐車場周辺
 キバナシロタンポポ：19株、シロバナタンポポ：26株、セイヨウタンポポ：19株 合計 64株

②「ドライブイン片岡」の前から旧越知橋西詰までの国道33号線の東側法面

キバナシロタンポポ：124株、シロバナタンポポ：75株、セイヨウタンポポ：4株 合計 203株

③新越知橋西詰から文徳集落入口まで

キバナシロタンポポ：88株、シロバナタンポポ：135株 合計 223株

④横倉山文徳登山口から町道沿いカーブミラーまで

キバナシロタンポポ：20株

⑤旧越知橋下の農道沿い（1ヶ所）

キバナシロタンポポ：10株

⑥宮の前公園内の中央道路南側

キバナシロタンポポ：1株

⑦横倉山自然の森博物館上方円福寺の資材置き場の林道斜面

キバナシロタンポポ：1株、シロバナタンポポ：1株

⑧林道横倉～長者線沿いの藁草畑下段の休耕畑の農道沿い

キバナシロタンポポ：6株、セイヨウタンポポ：6株

以上8ヶ所で、今の所いづれも横倉山の山麓に限られており、横倉山の植物がまた1種類増え1333種類となりました。

なお、越知町内や今成、横畠、鎌井田、片岡方面はまだ全く調査が行われていないので、もし“花が黄色で総苞外片がそり返らず、外片の先に角状突起のあるタンポポ”を見かけましたら、是非「横倉山自然の森博物館」までご一報下さい。

(おおくら こうすけ/植物研究家)

ンサイタンポポ・ツクシタンポポの4種類、外来種がセイヨウタンポポ・アカミタンポポの2種類で合計6種類だったのに対して、2015年の調査(中間報告)では、在来種としてシロバナタンポポ・キバナシロタンポポ・カンサイタンポポ・クシバタンポポ・ヤマザトタンポポ・キビシロタンポポ・ツクシタンポポ・トウカイタンポポ・シナノタンポポ・エゾタンポポの10種類(内3種類は県外からの持ち込み?)と外来種としてセイヨウタンポポ・アカミタンポポの2種類と在来総苞型外来種(雑種)1種類で総計13種類のタンポポが見つかりました。

また、2010年のタンポポの調査で、花が黄色のシロバナタンポポが土佐市やいの町・越知町などで見つかり、2015年の調査では重点調査目標の1つに黄色のシロバナタンポポ(新名称:キバナシロタンポポ)の県内での正確な生育分布域及び個体群の大きさの把握を取り上げ、調査の結果(中間報告)県内34市町村中18市町村でキバナシロタンポポの生育が確認され、中でも越知町の場合は集団のサイズが大きく、おそらく県下で最大の広がりを持っていると考えられると報告されて

おります。また他の地区は、キバナシロタンポポが単独で生育しているのに対して、越知町ではキバナシロタンポポが単独は勿論場所によってはキバナシロタンポ



セイヨウタンポポ



若き頃の写真

織田千齡の新たな写真か

安井 敏夫

横倉山北斜面にある楠神集落の中を一部通る杉原神社旧表参道沿いに、江戸時代（少なくとも江戸前期）から代々横倉宮（旧御嶽神社）の神職（宮司）を務めてきた織田家（旧小田家）がある。その織田家一族（本家）の中に、『横倉山タイプ植物』の一つである「ヨコグラツクバネ（ユリ科）」の発見者（命名：牧野富太郎,1912）である、教員で植物研究者・織田千齡〔明治4（1871）－大正8（1919）〕がいる。県下の下半山（旧葉山村）・黒岩・越知の尋常高等小学校、愛媛県立八幡商業学校、東京の早稲田実業学校などの教員を務め、理科教育に熱心で現場教育を実践したといわれる。生家跡は、杉原神社旧表参道に面した神職・織田家屋敷の表玄関から少し上って、右斜めに長く続く緩い坂道を上った所にある。

最近になって、神職の織田家の資料の中から、40歳前後の千齡と思われる写真が見つかった〔写真〕。羽織・袴姿で、一般によく知られている若い頃〔愛媛県立八幡商業学校時代？〕の千齡と目、口元、額の髪の生え際など顔立ちが極めて良く似ていて、千歳である可能性が高い。「月桂樹」と書かれた表札の横で、月桂樹をバックにモノクロ写真に収まっている。写真の縁に「国大^{*1}正門前にて」「二月六日撮影」と書かれただけで、年号が記されていないためはっきりしたことはわからないが、おそらく上京して早稲田実業学校の教員をしていた頃のものと思われる。羽織丈が長いことから、大正末～昭和初め頃を連想する。

千齡は、横倉山で発見した「ヨコグラツクバネ」が牧野博士によって大正元（1912）年に新種

として発表されて植物研究者として認められるようになり、越知尋常高等小学校から愛媛県立八幡浜商業学校へ転任した後、本格的な植物研究を目指して牧野博士を頼って上京している。いつ上京したのかはわからないが、愛媛県立八幡浜商業学校の存続期間は、明治39（1906）年4月から大正元（1912）年9月なので、この間ということ

になる。おそらく、大正元（1912）年に自らが発見したヨコグラツクバネが新種として学会に発表されたのをきっかけに学問を志して上京したものと推測される。それを裏付ける証拠として、千齡は牧野博士を講師とする『植物講習会』〔大正2（1913）年〕の資料を作成するために、「愛媛県立八幡濱商業樂學校」の原稿用紙を使用している（博物館ニュース『不思議の森から』vol.31,2014）。従って、八幡浜商業学校の校名が改称される直前に学校を辞めて上京したと思われる。また、大正5（1916）年12月7日に千齡は、東京都芝区



最近見つかった写真（提供：織田憲昭氏）

（現港区）西久保廣町十番地の「植物□□會」^{*2}で牧野博士と会っている（『牧野富太郎 植物採集行動録 明治・大正篇』,2004）ので、このことも次期的には合致している。

残念ながら、千齡はこの後間もなく病にかかり、郷里楠神に帰って療養することになり、博士と会ったわずか3年後の大正8（1919）年1月7日に49歳の若さでこの世を去った^{*3}。千齡の墓は、生家の北方約255^{メートル}の山の東斜面にある「平知盛之墓」脇の石段を登り詰めた「平神社」から北へほぼ水平に23^{メートル}の所の小さな尾根を越した墓地にある。妻・里興（織田家分家より嫁入り）との夫



織田千齡の墓

婦墓で、東に面して立ち、極めて均質な砂岩製の墓である。その左横には長女(行年15歳)・次女(同20歳)の墓もある。いずれも、昭和3(1928)年に二男・求己^{もとみ}によって建立されたもので、求己の墓は左横にある。

楠神地区には、この他、安徳天皇潜幸に随行した平家の知将・平 知盛を始めとする安徳天皇従臣たちの墓が点在し、また、推定樹齢200年とい

う幹周りともに“日本一”の「ニッポンタチバナ」(ミカン科;越知町指定文化財)の巨木などもあり、歴史と話題性に大変富んだ場所であるといえる。

また、杉原神社旧表参道は、江戸時代に杉原神社(旧中ノ宮)及び横倉宮(旧上ノ宮)に参詣するために利用された参詣道で、沿道には五輪塔や江戸時代の立派な武士の墓もある。その後明治～大正時代には織田千齡も度々通り、昭和9(1934)年8月2日には、牧野富太郎博士(当時73歳)を指導者とし、総勢150名の全国からの参加者による植物観察会が横倉山で開催された際の帰路として利用された道でもある。

このような由緒ある参詣道を風化させることなく後世に伝えようと、横倉山自然の森博物館友の会「フォレストクラブ」、地元「越知平家会」、それに「地域おこし協力隊」の有志で、長い間利用されずに荒れ果てていた参道を、平成26(2014)年から何度か整備を行ってきた。

今年には要所要所に道順のサインや案内板を、「フォレストクラブ」で設置することになっており、江戸時代の参拝者で賑わい、牧野博士たちも通った道を往時を偲びつつ歩く人々の姿が再び戻って来ることを願いたいものである。

- ※1 国学院大学(“国学大”)のことで、同大学には「明治43年第18期卒業記念樹」で、樹齢が100年近い月桂樹の大木(昭和33年当時樹齢50年)があり、同大学の一象徴となっている。
- ※2 千齡自身が採集した植物を展示・開催した「日光山植物展覧会」のことか?
- ※3 織田千齡に関しては、『ふるさと越知の先人たち』(越知史談会,2010)に詳しい。

(やすい としお/横倉山自然の森博物館 学芸員)

〔追記〕

原稿を書き終えた後、代々神職を務めた織田家分家の中の二代目神職・織田豊隆〔明治39(1906)～平成6(1994)〕が、神職の資格を取るため*であろうか、国学院大学に在籍したことがあるということがわかった。そうすると、問題の写真の人物が、千齡ではなく、母校の「月桂樹」の前で記念写真を撮った豊隆である可能性もあることになる。実際、写真中の「月桂樹」脇に立つ古びた表札に書かれている説明文が『飯田町□本所より移植』と読み取れ、明治43年の卒業記念樹である「月桂樹」が飯田町校舎(皇典講究所のこと?)より現在の国学院大学(大正8年改称)のある場所(渋谷)に大正12年に移植されたといわれており、同一の「月桂樹」であれば、千齡が没した大正8年との間に年代的な矛盾が生じることになる。

※大正12年8月に神職養成科目を修了



平 知盛の墓



小松少将有盛の墓



五輪塔

博物館行事

企画展：『西村洋一水彩画展～旅の途中～』
2015年9月19日（土）～11月8日（日）



“芸術の秋”にふさわしく、水彩画家・西村洋一氏（旧窪川町出身）による絵画展を開催する。氏は、不運にも若くして不慮の事故に遭い、車椅子の生活を余儀なくされた。両手足の自由がほとんど利かないという重度の肉体的ハンディを背負

つつも、それに屈することなく、独自の描写法を考案し、障害を感じさせないほどの極めて繊細なタッチの水彩画を描き続けている。氏の作品、及びこれまでに出版された画集に収まった作品とそれに添えられた詩文は、いつも観る者に強い感動と夢、そして生きる勇気さえをも与えてくれる。

前回当館で開催した水彩画展からすでに8年の歳月が経ち、また新たな感動を呼ぶ作品の数々が観られた。今回の企画展では、主に四季の自然を描いた作品37点を展示し、西村洋一の水彩画の世界へと誘った。



「私に障害がなければ、絵を描くことはなかったでしょう。この世で自分の果たす役割を探す旅が人生というものかも知れません。私は今、その役割が何なのか、それを探す途中なのです。」



主な感想として、「素晴らしい一言です。感動しました。」「水彩画とは思えない重厚さに感動しました。点描の重色に心がこもっているからでしょう。」「今まで見た絵の中で一番感動を与えていただきました。ありがとうございました。」「すばらしい絵にいつも感動しています。三冊の本の詩集から、私は生きる元気をいただいています。」「人に出来ないことはないと言われ無限の可能性を感じました。素晴らしいかったです。」などがあった。

企画展：『ひよこの灯』

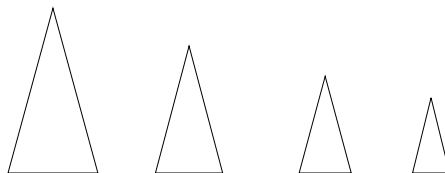
2015年11月21日（土）～2016年1月11日（月・祝）

電気のまだなかった時代から、私たちの夜の生活に欠かすことのできなかつた「灯」。

今回、高知県在住の作家・徳永泰次郎氏（灯工房 ひよこ）による、県内産の素材にこだわったいろんな「灯」を紹介する企画展：『ひよこの灯』を開催した。照明の本体（骨組み）は、県内産の竹や桜などの木材、そしてそれに貼る紙は、やはり県内産の素敵な土佐和紙や不織布などのこだわりを追求し、土佐ならではの個性的な“優しい灯”が観賞できた。

今回展示した灯には、コーンランプのうち今回の企画展のために土佐和紙（いの町・日高村・土佐市高岡町産）を使って新たに製作された大型のもの：52個、従来のガラス繊維と不織布を用いたもの：200個の他、竹灯、行燈、瓶ランプなどがあつた。

幻想的な土佐ならではの「灯」を観賞し、各人それぞれ違った感性による味わい方ができたのではないかと思う。



《関連イベント》として、

- ・『自分だけの灯をつくろう！』
- ・『クリスマス水庭イルミネーション』（12月22日、23日の2日間・夜9時まで開館）

を開催した。特に、後者は、水面、窓ガラスに灯が反射し、豪華でムードがあり、来館者に喜んでいただいた。

「きれい」「幻想的」という感想が圧倒的に多かったが、この他「柔らかく優しい和紙の光に癒されました」、「灯と和紙との組み合わせ。暖かく幸せな気分になりました。また、明日から頑張れます。」「とてもきれいで、美しく、すごく心が落ち着かされました。来てよかったと思います。」などの意見もあつた。



友の会だより

「熊本県・花園陵墓参考地 視察研修」

2015年11月14日(土)～15日(日)〔一泊二日〕〔参加者：15名(内事務局2名)〕

宮内庁指定の全国に5ヶ所ある「安徳天皇陵墓参考地」の一つである「花園陵墓参考地」(熊本県宇土市晩免)と建築家・安藤忠雄設計の公共建築である「熊本県立装飾古墳館」(熊本県山鹿市)を主として視察・研修を行う。

「花園陵墓参考地」は、別名「晩免古墳」(円墳)とも呼

ばれている。小高い丘の頂上部にたて6.5m、8mの長方形の陵墓域内に直径3.2～3.5mの円墳状の陵墓があり、そこから舟形～家形石棺〔4世紀中頃～5世紀〕が出土している。石棺内部の“十六弁菊花紋”が刻印されていたことから、古墳自体が安徳天皇の陵墓ではないかということで参考地の指定を受けた。横倉山の陵墓参考地と違って、立派な石段はおろか鳥居もなく、規模ははるかに小さい。

「熊本県立装飾古墳館」は、安藤忠雄の初期の頃の設計によるもの(1992年3月竣工)で、岩原古墳群の一角にあり、長い螺旋状のスロープをもった前方後円墳のような外観をしている。古墳内部の石室や石棺がレリーフや彩色を施された装飾古墳の専門の博物館。「横倉山自然の森博物館」は、安藤忠雄設計によるこの5年後の1997年9月竣工で、再来年が開館20周年に当たる。

視察研修の最後に、熊本県を代表する“日本三名城”の一つ熊本城を見学する。豪壮堅固かつ優美な石垣と広大な城郭に只々圧倒される思いであった。



花園陵墓参考地



熊本城



熊本県立装飾古墳館

「初日の出を横倉山で」

2016年1月1日(金・祝)〔参加者：10名(内事務局3名)〕

今年の元旦は、昨年から続く暖冬で暖かく、しかも快晴で、はるか彼方の太平洋上の水平な雲の上から真っ赤な太陽が昇り、これまでのうちでも素晴らしい初日の出を拝むことができた。



〔水庭イルミネーション〕

横倉山ミニ歳時記

■ヒトツボクロ *Tipularia japonica* Matsum.

2015年6月4日、横倉山で「ヒトツボクロ」(ラン科ヒトツボクロ属)が植物研究者によって見つめられた。漢名:「^{ほくろ}一つ黒子」、葉が一つ葉と珍しく、葉表が暗緑色なのに対し、葉裏が紫色であるのを「黒子」に例えたものという。葉縁には波状鋸歯があり、葉柄は長い。絶滅危惧種で、横倉山でもかつて発見例(1961年)があるが、比較的珍しい。県内では、東は室戸市・北川村から西は梶原町・旧大野見村まで10箇所確認されていて、中でも鳥形山(仁淀川町)には結構見られ、群生する所もあるようである。本州、四国、九州に分布し、外国では、朝鮮(南部)に見られる。

台湾、中国、北アメリカ東部に、それぞれ近縁種が分布している。また、花の色・形状は異なるが、同様の一つ葉を出すものに、本州(中部地方以北)に分布する「ホテイラン」がある。



【博物館日誌(抄)・平成28年度博物館行事予定】

- 平成27年9月19日(土)～11月8日(日)
企画展:『西村洋一水彩画展～旅の途中～』
- 11月21日(土)～平成28年1月11日(月・祝)
企画展:『ひよこの灯』
- 3月1日(火)～3月27日(日)
企画展:『日本画家 八木明個展』
- 4月23日(土)～6月5日(日)
企画展:『高橋宣之写真展～闇の色彩～』
- 6月11日(土)～26日(日)
『写真展 土佐』
- 7月26日(火)～29日(金)
越知中学校職業体験
- 7月16日(土)～9月4日(日)
夏休み企画展:『仁淀川の自然×高橋宣之』(仮称)
- 8月13日(土)
夏休み博物館教室 ～勾玉作り～
- 8月20日(土)
夏休み博物館教室 ～オリジナル万華鏡作り～
- 9月24日(土)～11月13日(日)
企画展:『野並允温 傘寿記念展～お四国参りを終えて～』
- 10月15日(土)
にしみねくみ染色教室

- 12月17日(土)
ワークショップ:「^{あんどん}行燈作り」(灯工房ひよこ)
- 12月23日(金・祝)～平成29年1月22日(日)
企画展:『越知町の懐かしい写真展-小日浦-』
(仮称・予定)

【博物館友の会「フォレストクラブ」・平成28年度活動予定】

- 11月14日(土)・15日(日)〔一泊二日〕
視察研修:『安徳天皇花園陵墓参考地・熊本装飾古墳館等見学』
- 平成28年1月1日(金・祝) 初日の出を横倉山で
- 4月9日(土)
“土佐の投入堂”・聖神社見学とアケボノツツジ観察会
- 4月 友の会運営委員会
- 5月 友の会総会
- 6月4日(土)
仁淀川水質調査
- 6月 横倉山のヒメボタル観察会
- 7月 杉原神社旧表参道 案内板設置
- 11月12日(土)～13日(日)〔一泊二日〕(未定)
視察研修:①案『伊勢神宮』
②案『安土城址・犬山城(国宝)・如庵(国宝)・郡上八幡』

《企画展のお知らせ》『高橋宣之写真展～闇の色彩～』(2016年4月23日～6月5日)

清流・仁淀川の稀に見る透き通った清らかな青い水を“仁淀ブルー”と名付けた、ネイチャーカメラマン・高橋宣之氏(高知市在住)。氏は、四国の川は最高で、特に仁淀川を“世界に誇れる川”と絶賛する。



今回、これまで20数年来四季を通して足しげく通い続け撮影した、仁淀川流域の自然一水・森・光・闇・生きもの一を対象とした写真

の数々(約30点)を紹介する写真展を開催する。美しい水を生む森の一つである原始の森・横倉山で繰り広げられる“ドラマ”の中で、闇の森で光る神秘的なキノコやホタルなどの生命体を被写体とする作品を中心に、高知県内で撮影された同一テーマの作品も展示。

寄贈御礼

牧野博士が“横倉山で最も印象に残っている植物”という「トサジョウロウホトトギス」(『横倉山タイプ植物』の一つ)の鉢植12鉢を、岡林鉄山氏(越知町夜川)から寄贈戴きました。秋にどれだけの花を咲かすのか楽しみです。有難うございました。

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間: 午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料: 大人……………500円(※各20名以上)
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知
JR普通 約50分

